涙のアリバイ

――手先表情映画――

夢野久作

すべて無字幕、説明なしで、手だけを中心とし、その他の物体は、手の背景としてうつす。但、生きた人間の顔は絶対に取り入れぬこと。

俳優登場

◇悪人の手……四十恰好の色の白い、指の長い、節の高い、青すじの走った毛ムクジャラ……。

……右の手の甲に大きな疵痕（きずあと）……。

……左の薬指に「槻田（つきだ）」と彫った巨大（おおき）な認印（みとめ）つきの指環（ゆびわ）一個……。

……時々思い出したように、ねばっこい、ヒネクレたわななきを見せる……。

◇美人の手……綺麗な、スンナリとした、上品な中年増（ちゅうどしま）……。

……左の薬指に華奢（きゃしゃ）なダイヤ入りと、エンゲージリングを一ツずつ……。

……優しい心のふるえを時々あらわす……。

●女中の手……真黒く、丸々と脂切（あぶらぎ）った……。

……ダラリとした無神経……。

●探偵の手……三十前後の、黒くて、強そうな……。

……頭のよさをあらわすテキパキとした動き……。

第一の場面

……贅沢な事務用机の中央の、椅子に接した三尺四方ばかり……。

……凝った文具いろいろ……。

……高雅な卓上電燈、写真立て、豆人形、一輪挿し、灰落しなぞをキチンと並べてある……。

……一隅の置時計は九時十五分を示している……。

……薄暗い窓あかりがさしている……。

……時々自動車のヘッドライトが窓硝子に近づい

ては消えて行く……。

◇悪人の手登場……卓上電燈のスイッチを捻（ひね）り、あたりをパッと明るくする。

…………手袋を脱いで机の上に放り出し、続いてシガーケース、財布、名刺入れ、ハンカチその他を投げ出し、両手を揉み合わせて疲れた表情……。

●女中の手登場……珈琲（コーヒー）と、帝劇マチネーの案内状を机の上に置いて退場……。

◇悪人の手…………立ちながら珈琲を取り上げつつ案内状を見る。

……ペンを取り上げて同封の葉書の「出席」と印刷した下へ「槻田万策（まんさく）」と署名をして傍に置く。

……やがて椅子に腰を卸（おろ）し、両手を机の平面にピタリと静止させ、あたりの様子を窺（うかが）うこなし……。

……電燈を消し、机の横から、大きなインキ瓶を取り出し、夕あかりに透かしつつ机の上のインキ瓶のインキを半分ばかり、大きな瓶へ注ぎ返しもとの位置に直す。

……今一度あたりの様子をうかがいつ

つ、左右のカフスの間、その他、衣服の各所から、宝石を抓（つま）み出して、一ツ一ツインキ瓶の中に沈めおわる。

……悦（よろこ）ばしげに両手を揉み合わせつつ電燈をつける。

●女中の手登場……『丸の内私立探偵局　連水晃（つれみずあきら）』と刷った名刺を主人の手に渡す。

◇悪人の手……その名刺を裏返したりヒネクッタりして困惑した表情の後（のち）「こちらへお通し申せ」という手つきをする。

●女中の手……恭（うやうや）しく握り合ったまま退場……

……。

◇悪人の手……女中が遠ざかるにつれてブルブルとふるえつつ、立ち上るこなし……名刺を握り潰そうとして、又ハッと吾にかえる。

…………間もなく慌てて机に帰り、ペンを取り上げ、レターペーパーを拡げて手紙を書き初める。

「拝啓　本日は光栄ある晩餐会に御招待を受け、格別の御厚遇に預り、殊に、朝野の名士数氏に御紹介を賜わり候事、面目これに過ぎ……」

…………ここまで書くうちに次第次第に手

がふるえ出し、文字が固苦しく乱れ始めて、とうとう中止する。

●探偵の手登場……ツカツカと机に近づき、立ったまま握手を求める

◇悪人の手……ペンを棄て、さも愉快そうに立ち上ってこれに応じ、椅子を指して「サアドウゾ」というこなし……。

●探偵の手……椅子に腰かけ、ハンカチで汗を拭う。

●女中の手登場……探偵の前に珈琲を置いて退場……。

◇悪人の手……悠々と椅子に腰を下し、机の上の

シガーケースを取り上げ、蓋を開いて探偵にすすめる。

●探偵の手…………軽く左右に振って断る。

◇悪人の手…………かすかにふるえつつ、自分でマッチを擦り、葉巻に吸いつける。

●探偵の手…………机の上に書きかけになっている晩餐会の礼状を指し「そこで盗んだものを下さい」という風に両手を軽く重ねてさし出す。

◇悪人の手…………強く否定して、身の潔白を表明する。

●探偵の手…………礼状の文字のふるえを指し、鋭く

詰問する。

◇悪人の手……非常に激昂し、固く握り締めて机をドンドンとたたき「出て行け」と命ずる如く入口の扉(ドア)を指す。

●探偵の手……皮肉に屈(ま)げたり伸ばしたりして悪人を指し、嘲弄しつつ立ち上る。

◇悪人の手……ソロソロとポケットのピストルを探り、半分程引き出す。

●探偵の手……往来に面した窓を指し、腕時計の時間「九時半」を指し示しつつ退場……。

◇悪人の手……ピストルを握り締めたまま見送る。

……やがてピストルをポケットに押し込み、急いで手袋をはめレターペーパーの書きかけを下の二三枚と一緒に破って、これもポケットに捻じこみ、机の上に投げ出した身のまわりのものを取り上げ、電燈を消して、探偵のあとを逐(お)うて行く……。

——〔間〕——

◇美人の手登場……しずかに電燈をつける。

……………指環をはめ直し、指先に残っている化粧のあとをハンカチで拭い消しなぞしながら、何気なく机の案内状と葉書とを取り上げて

みる。

…………さも嬉しそうに両手を打ち合わせる。

…………インキをつけたまま投げ出してあるペンを、ソッと取り上げて「出席槻田万策」と書いてある横に、優しい筆跡で「同　シズ子」と並べて書き「欠席」の文字を消そうとして、インキの切れたのに気付き、つけ足そうとする。

…………と……インキ壺の中に何か落ち込んでいるのに気がついて、ペン先で二三度突つき、その中の一個をかき上げると、ハッとし

てペン軸を取り落す。

…………………ワナワナとふるえる指でレターペーパーを二三枚破って、吸取紙の下に重ねて、机のまん中に置き、抽出からピンセットを取り出して、インキの中にさし入れ、宝石を一つ一つ拾い上げてインキを切り、スッカリ紙に包み、その上からハンカチでくるんで懐に入れる。

…………………別の新しいハンカチを取り出して泣く風情……。

…………………そのまま静に、電燈を消して退場……。

——〔間〕——

●探偵の手登場……左右とも手袋をはめたまま、ソロソロと机に探り近づく。

……懐中電燈を照し、そこいらを調べまわる。……紙屑籠……唾壺(つばつぼ)……小型の瓦斯(ガス)ストーブなぞ……。

……大きなインキ瓶の口が濡れているのに気付き、取り上げて二三回振ってみてから又下に置く。

……机のまわりを押しこころみて、秘密の落し戸の有無をたしかめる。

……次に、机の抽出しを下から上へ順々に検査して、机の表面まで懐中電燈を持って来る。

……まず、案内状の回答用葉書に新しく「同　シズ子」と書いたのを照し「欠席」の文字の上のカスレタペンの痕（あと）を検（あらた）め、次いでインキに濡れたピンセットを照し出す。

……すぐにインキが半分以上減っている壺に電燈をさしつける。

……右手を握りしめて「占（し）めた」というこなし……。

…………………懐中電燈を消して退場……。

第二の場面

…………暗い部屋に置いたピアノのキーのところ、
三尺四尺ばかり……。
…………楽譜は置いてない……。
…………一方の窓から薄あかり……。
◇美人の手…………何か快活らしい曲を弾いている。
……………………時々手を止めてハンカチで涙を拭
うようす……。

——そのうしろから突然にパッと光線がさす——

—

◇美人の手…………ハッとしてハンカチを取り落す。

●探偵の手…………懐中電燈をさしつけつつ近寄る。

◇美人の手…………わなわなと慄え出す。

●探偵の手…………ピンセットで物を抓(つま)み上げる真似をして見せる。

◇美人の手…………宝石の包みを差し出しつつ、わななき悲しむ。

●探偵の手…………包みを受け取って中味を検め、固く結び直して無造作にポケットに入れる。

……くら暗の中に、拇指（おやゆび）を出して見せ、食指とくっつけ合わせて「お前と共謀だろう」と詰問する体（てい）。

◇美人の手……烈しくわななきつつ左右に振って否定し「ピアノを弾いていた。何も知らない」と主張する。

●探偵の手……懐中電燈をつけ、ピアノのキーの上に落ち散った涙を一ツ一ツに照し出すうち、指先が感動して微かにふるえ出す。

……ともったままの懐中電燈をしずかにピアノのキーの上に置き、わななく女の白い

手をハンカチごと両手で強く握り締め「御安心なさい」という風に軽くたたいて慰撫する。

——その上から涙がポトポトと滴(した)たりかかる——
—

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房
　　　1992（平成4）年8月24日第1刷発行
底本の親本：「日本探偵小説全集　第十一篇　夢野久作集」改造社
　　　1929（昭和4）年12月3日発行
初出：「猟奇」
　　　1928（昭和3）年11月号
入力：柴田卓治
校正：土屋隆
2005年9月10日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。